止戈類纂

和書門
類
二五二三
號
九七
函
八
架
四九
冊

内閣文庫
和書
類
二五二三
號
四九
冊
一五
函
三
架

十一

内閣文庫
番號 和 25223
冊數 49 (11)
函號 154 20

国立公文書館
National Archives of Japan

止戈類纂巻十一

六方　畧

伝刻きく此郡にて伝吉と海伝と尉陣の所伝吉夜分と
数度こゝに於て出合ひ為ふ来て恐くは海伝八陽田太炊安田
上総外五人と左右より出し海伝も秩父郡内宮中小火事あり火
消と定る所に夜分に成て海伝出向ふよみ恐くは海伝
そこに人数を押出し敵と伏て待ふ夜うち成ひとし成人数所
小宮中と焼これ敵和すると見て伝吉つと走ると海伝
付かつて陽田安田もおきてうつ三伝ふうるとて伝吉一緒ふて退伝
ひとり此時甲氏勢多くうれう海伝の軍の勇ふて蕃

明治十一年購求
鈴木重壽南山樓珍藏之記

とゝろさるゝ　大平夜伝

小絲にて伝兵衛伝尉除の対立ハ町もれもて伝兵衛ハ
乃かやと刈しもさ屋の糸く積重ね火と有て中の糸ハ伝兵衛
除伝兵衛と云ひて逃うゝんとの行ひ〳〵と山本勘助後く留中
者ると云ともとうくいひあ〳〵る勘助者ひ伝兵衛の大切日書ハ
ひ弥所と紙てなとやり行ハ〳〵きもハ引ありといひ行りゝ伝
引ハて宮中よかく〳〵入ハ〳〵とゝ勘助ハいひゝ今貴ハ夜
対ある夜なり世ハすゝ〳〵ひ出ハ夜対ありとて行りゝ
言〳〵とく恒夜対ハて勘助二番ハ合ハ合ハ者対ハ伝兵
衛ハの事なくかくゝんりハとて対ハりとゝかくのとゝ勘助

うと聚いたりとさる左ハ氣人ハ利文天の書化ありといひ伝り
しとなり　同上

弘治二丙辰年八月廿三日伝兵衛ハ川中島出ハ合戦ハ宮目の合戦
上野原合戦と申ハ北合戦とて此年三月ハ伝兵衛ハ南年三月ハ伝兵衛ハ
合戦ハ〳〵ハ伝兵衛ハ出合ハ〳〵ハ恒常務負ハ〳〵ハ〳〵ハ
百姓事ハ平伝兵衛出合ハ恒常務負ハ〳〵ハ〳〵ハ伝兵衛ハ
て伝兵衛ハ伝兵衛ハ武ハ七人物ハいつもハ伝兵衛ハ
知ハり伝兵衛ハ信の物負ハ〳〵ハ〳〵ハ伝兵衛ハ今度ハ出ハ伝兵衛ハ数ハ合
二百人ハ伝兵衛ハ人の人数ハ伝兵衛ハ紙ハ伝兵衛ハ
いつれも武百人ハ出ハ伝兵衛ハ小原ハ〳〵ハ伝兵衛ハ

て吳見ちゆして武百二人の人数とをひとて
結婚後小笠原信濃守信濃と合戦ありしかとも
旗本にて合戦なき信濃守信濃合戦とえ出仕なく城後背走
さ時ら横と打込とて見物者とて一戦なく打破とて
信濃ハ体力不機嫌ふく打戦と不申と八人ふく合戦
信濃時と員にて光機嫌ふて合戦出行被い拙信濃守の先手
打横ふて吳の一先味方及敗吳又八戦意見きけら信濃下知
なしふ此ハ合戦信濃拙光上列戦中加賀社宣様まて八信濃
守信濃と中事吳ら吳武田信玄ハ信濃と信濃と及家
光の吳見と頃ら人数ふ多く出ちと中ハ八ふて合戦と和

中ハ信玄公ふ光武百人の人数ふて出海ふ多逃物見と信
濃守信玄公行き光ふく信濃中と見て信玄公ハ中上ハ今度信濃ハ
永滝と見ハ中ハ出物見中と信玄公出ふて行とて永滝と見ハ
ちと出不審ふ敵ハ物見中と上ハ信濃の陣小屋ふ敵出彩様走
ハと中上ふ信玄公出ふ石ふ出ふるつきふ敵印無後者とふ信濃守
信濃ハ信濃陣小屋ふ火事ふて五必ハ方ふ光人ふ人ふ人ふ人ふ光相
背中光人ふて光出ふく光ふ一戦ふ出事ふて中付ハ見ふ出ふ
ハふく敵ふ中ふ信濃守ハ物出信濃ふ吳方ふ吳ふ出ふ
火事ふ出ふハ信玄公井伯ふ信濃ふ信濃の小屋ふ
事ふ出ふ光ハ敵後勢五六ふ方と吳ふ中ふら信濃守力と物て

出し甲州勢共是を見て悉く信玄公此は旗本続く向つて来
織く名将と盛入も信玄公の御前小来る胴る之を返し
は其る為と謙信陣小屋の前へ追来り謙信の足軽共を見て信玄
の陣中へ乗入る敵れ兼かいさゑて法るもんといふ謙信が討村井樓
く居るを見もして馬の頭も来るを見給て主居年七と呼ら中に
只今信玄方へ乗返もありしに我方が壱人まても出れば急度由
来小て中村使者小急ぎ納させよと大声に呼付は従って馬
郷山とを見て退く謙信方へ足軽共人是不及出信玄衆
の内く足軽之白人が続る中続経軍伏く退しまて謙信の足軽
丸る是小出まて討とるは御之謙信方壱人も出中ゟ多く信玄方

ハ軍伏の主の丸多くと見て花純あつり川へ越は信玄公の御本陣へ謙信
自ら掛り来り取中ハ陣ふて八合戦節勢と信は中物信玄公
め御旗本あいさ御奉より人方乃陣引揚給ひて其夜ハ野宿小
甲陣と退散致用心と御付四方ニ篝を焚夜もすら陣取ニ罷
候ひ　謙信記
謙信ハ信玄公の引退かるとを見もして急ぎ人数を二日分し兵粮
を為さむ七月五ヶ西の刻まで信玄公の御陣を志して五ヶの夜中人数
押出て九六日の卯の刻ニ上野原信玄公此陣へ押寄先手村上石口
石坂と丸の尾上へ信玄公の備へ切入て信玄公の方小くも一二と
定取合て鑓を合せ火花を散し戦ける謙信方まくり立られ

凡数万の甲列勢勇進して互に合戦し遠江勢と近江勢二の
川口対して満身の年人長井兵部大輔人数を推出し先陣と入合戦仕る
信玄公勢三万余り勇猛く兵部大輔年人討死し汗馬の者共
仕り候て遠江と横須賀と入信玄勢と実五万甲斐勢数ふ内負川口と
く味と横須賀と入信玄勢と実五万甲斐勢数ふ内負川口と
川口陣所を長井石川松平一郎左衛門尉甲列勢と近江と甲
列勢三万遠江西内義演理押を敵とかくて三の余人入替て
越後勢と内ゆく呼て戦神後勢立合無数 之く来り戦
不く甲列勢大陽に科言梨海地を月出三の花くて切く入戦
後勢と立色て諸人戦後勢大勢打死信玄公神後勢信玄尾

越前長尾景虎宮湾三河守甲斐勢六七の中入武田方て
切て入安田信春山本伊奈横須賀実入戦甲列勢ゆまり信田
真利土屋宮実一業新日向大和守小二三の内り火花と散
負医ふて引退り二年ゆ志と戦中家遠江国宮信玄
後河守小勢二の内ふく遠江の内ふ見合戦小見かまり見和
より山のほく信とたく合戦と見地仕信玄ら戦後勢色
あしく方見甲斐勢も色宮四方小て近くより合戦宮中小
て信玄公の諸本信小勢と察し後河守内法ケ二信ふ仕
信玄公乃弟左く切く入ら信玄公の弟和も西上信戦之家
ケ後河守山のほう家内切迫ふ信玄公の信信ふ御みさ

走て伊豆走り事実為ら諸侯ら故法へ家人信義ともら
なりれやもの方と大変ら為て池田信玄の計略今
英俊下山侯七市郎り年人毎度下郷ら田家ら伊と共て信玄
とのうちるとうく既ら信玄公ら引退のう甲斐勢本陣の後軍
とえうく皆ら後軍して引退退けう甲斐勢とおうう越後勢併と揚て
引退中に方し合戦八八月廿六日初めて和睦の下井ます於合戦合
戦有り一番合戦八信玄公指二番目海信方指三番信玄公の指
立番目信ら合戦八海信方大勝ら在来い信玄公方討死ら十三人
海信方討死八百九十七人（月上）
弘治三年八月廿三日景虎公出馬ら先ら八陣取ら進て川と

渡し鶴翼ら陣形と張給と進ら事又先ら陣取ら義時後
来四月ら陣形二行ら成り旗と進ら事今度御後の陣ら八長陣と
見へうく彩とこれうとく信玄ら先ら一番ら中
越後の陣取ら火事有て一人も進ら出ら者あら八ら線
黒科ら行ら人と作出されり海取ら千夜の夜ら出ら人ら
以来のうく越後の陣取ら火事出来して さうくうの信玄ら
時信公為て信玄とかしもう子四て一人も出ら者一て内越後の陣
取と見渡せ八信玄為とあけ方ら押ら成ら後ら信玄ら指ら七ら
斗二行ら事を考ら歌と信玄ら信玄ら本陣ら八景虎公麻机ら移ら
主皆一百余三ヶ月ら引ら進ら考ら歌と信玄ら此ら越ら人ら

あるに一人も生くまじかりめるを以て先公さきに
めされるに名を権兵と申す中ゆゑ又時信公仰せに
馬の尾と切る敵後の陣所へ扶うけるとあるを聞て必欲
体より是程の馬と目ふみ出つきを時信是程と計れ知るもて
命一百騎計に京出なれば京都いおさの兵程き武士ふく立百騎
の武士とのおきしと返りて出て一騎
軍の体にて来て命を問ひ一騎体とはきかくをのの
兵を命ずるとて立く目をふれまいて来て搦て射て
宮へ出なとの本陣へ三百思いせをく馬二三疋捕とり敵
後の陣所へ返り是程の人数出く渡るなり返りの

見られ敵後の陣所より一人も出ず時信仰せ作者は京
都名人にて鎌倉のうちの切るのうれ大河と知くほと
後は思ひ出く私行列時の間心留るの有中ん大なるなき
間く飛ばとり引ばとく高市へ返り弟なる者なる者
廿四日小川返り（甲伝奏向記）

永徳元年二月二日上野国より貢ぎらんと一万五千人と軍
し甲府と打立余須の浜と色上氏南牧の方へ出る敵後
市り立て小幡尾張守信定対面ら後信定は是下お軍
小幡岩之丞直の人まく有ると信定へ為ひ作者を
青垣大方来を付くと物語なると扶を付くと申れ

信玄公は初め御のあれいとて内藤修理亮を始め小幡
始め皆焼死の家付き老口付の人小も残りの内を残せ義兵
衛の方へ活付火と焼しに義兵衛より指図なく不足の小幡
始れ残る火を付て引き取退き立しと手合軍をなして
松井田安中長悔三ヶ城へ向後活させしなる軍の様子義
兵衛の軍を進めを国衆の城へ押寄せの知恵
指図なれば内藤修理亮を見て小幡始め地元の拙火
引き取退き七郎彼天地と寄しより長年大小競敵大勝
あれを付しなりひらん城を寄くて後行事なと抜取
や美ひらり 義悔軍記

武田義信日信玄公と御信と信長小て出立の時間を
て一直人数を伺ひ信玄も伺し信玄公間を
御て寄始を見北一戦と取合ずと見西信玄公之を
くて間とふ御て信玄公も伺と立かく見和方味方
北く活所と云宿あり信玄公人数を立ず小川の
御信の方流より迎し信玄公信く北活所の宿を敬
焼もて出れしなの者と定ひられ形て備安定
小幡ふく信玄公海より小見として来り多う進出
中ると来今度小見迎と来り向見し後く活所の宿
と焼中ると数て多ると百人小て活所の宿へ

ほり出すの人数と多勢なるゆへ出張せしと
清野の宿れを焼き不揃これ此出てあうひ七ひ徒武
方等れとを指せ宿より清ロ家かしこの家の住蔵の住く出
しこて相徒住宅の人数押うみ丁集幅二百三百丈有
俗如清川有之と兵庫方城くのひ橋と三ヶくくもと
然てとみさする故五より見あれ所橋と渡とと
ぬけふして兵橋と越そもくこ不くと出して
鉄砲とすする出下人数とこれ人数と出
方へ川取り橋と渡り丁越敵と鉄砲して出ふ住手
丁取橋と中より強くみそもれい橋とれとの敵橋

所方下ハ見入れれとこ住て付捕敵差引とあく
ハ清野宿とは焼とおとこ情く兵庫見合く見住
小橋と越して鉄砲ちそうと見て住住清野の方へ
も人数と出河と越と住住と一銭もなく人数と出
ふ見住くと橋兵庫方武田とくく清野宿と焼せ
さ里一ヶ方の地形く岩屋基と引くこもふ丁新と
覚くれく馬場兵庫方之文武田勢ふれい見と様の
とと新参事ふり住丁と住信公清ハれる雑有し
い紙とと新野清野の宿と不焼れるとあて住あと
と住ハ作丁大抵と住丁義由住

池田内蔵助殿家来とて縄をかけ右番船に乗せ
きものにくあらまく宵の内色々のものを作り右ものを
夜中ひそかに言葉ふくに作りいうちふいふくあとさきを
結ぶとて上をありしく作りに内にそろく縄をくくり
けり色々宵の内物作りて作入るに何を作縄をと
き逃申しい年寄い人居しかくしもしもふわき
内ものゆえ入用にちんぷんかんと作れ
早氏の忠ひの公数十人仕事に頼く事ありて山小屋く
たて親ら仕主係をたやすくおれたりと思ひ居右
ろう忠ひのこと城中に忠ひ入なるうへかれつと

問ふふ内の寄義く夜とりの寄ふけく手伝ふ長なる
点りもまく料をゆくいとこと仕主今山小屋に忠ひ入れん
急いふと問ふふ彼先見脱ふ社を探と初り稼を過て高を
ちたりへ主夜とりの七と言ふ仕主をもより山小屋ふ向く
係をとり主義して夜とり遠方なく呼いもり日数と
経くやく点り出来る時山小屋より夜討くとりると家より
係りこるるを忠ひ伏主と主て討れもこり常と記
天正十六年八月廿二日主より頻く京家物し夫降墨雲脚
速微雨降主夜風雨主法く形大水中々物引右の内
相川治部の帰寄小和歌重長こ中るハ右の内と示合

て い 昔源義経平氏追討の為ふえ一番二年正月十六日の夜の
暮博多列浦を船出す時暴波望舟二日七海路
と三時ばかりふき上り豊十七日逢坂国摂津と之境と
付たもとり僅故の八海(二日)の夕方と夜と日ふけく此
大坂城の山路と地くはの十八日の午時ふるれの五番くゞと
拙八寄(押寄)禁掠と焼拂平家と西海へ逃落(押渡)長
つ忠種浦へ逃行く平氏と来くたしと奇兵策方
の統率ふ寄し故の皆悦と義迅速の武勇命を以日打渡
ての軍前今日の大疾捷攻且又れの大風白波を押寄
風しとい故方思寄命故之家不去ち繋不何心之

あらん吾敵去御所丈不急攻法を不去ふ吾ふく備く
関根城へ押向攻壊いんと十七年城れて言白系もあう
ふ法度と思ふ役多事ふ為た去十六日村と打立てより
今日之七日勢軍事不其食飲不為寝休人乃疲
歩渡くはあるうくさと進むと彼須臾く思作せ
者た思法へ恨要事と但一名れの時敵地防ふと一涯
ふ思ふ浅くい庄内方ふ武功の志ふれ此時と大事と用
心を下一番一城主種性左馬頭ハ世功の男ふ夜敵押て名
ける者くさきた生ふ留ふ進ん長く後途と警生ふ者
渡ふ志ふ力勢乃須田武ふい実ふ生身ふて浦く乗道く

国立公文書館
National Archives of Japan

志し博学まして心をとゝ一廣用に可達ゝと人毎に参
らされた郷年の小坂合術に六ヶ敷と雖年八十五を不
足差支なき八十に八九さ武ゝ武ゝ馬の進ゝと拵手事なる
まゝ〳〵高ゝ下ゝ根津々々馬武敵ゝ下ゝ六ヶ津刑部
武人勇士拵羅武初の志なまを以ゝ〳〵ゝ上参
用なる国下として一方の大切ゝの弟弟ゝ武お芸ゝ軍役
同ゝ〳〵ゝ弟斗事なまを以て武ゝ馬を付ゝ
他ゝ又実なゝ八為近世の二流武八関東流の外又峯樣
一流新後秘伝更ゝ紙お伝拵相沢相手ゝ出ゝ石集物利の事
漢ゝ中合代勢ゝ人合ゝ酒ゝ石ゝ拵ゝ馬拵相果ゝ文

度をよとゝ下知ゝまを八流ゝ一同ゝ勇ゝ馬物具海道具ゝ
押出時拵ゝ出ゝ〳〵て旅年を以拵田町ゝ藏製ゝ他
重ゝ士大ゝ八旗ゝ候ゝ年ゝ弱八千俵壱の打栖の検ゝ
取船ゝ馬ゝ拵ゝ八以偃ゝ〳〵ゝ唯引伝ゝ〳〵て
術拵ゝ〳〵ゝ是拵八矢ゝ拵ゝ〳〵ゝ拵ゝ〳〵ゝ拵ゝ火
縄の〳〵海ゝ〳〵て帝後ゝ〳〵ゝ列ゝ酒居並ゝ年練ゝ武
ゝ拵ゝ〳〵ゝ　美寛武慢

横沢の桑林花市志ゝ長尾伊賀坂戸ゝ城ゝ入ゝ有雑後
（走雑の在自由ゝ〳〵ゝ八月上刻一流偽城主小坂ゝ為ゝ〳〵ゝ
外後ゝ〳〵ゝ八初伊賀守ゝ〳〵ゝ流伝ゝ〳〵ゝ代十ゝ年和坂ゝ〳〵ゝ
数度別流ゝ〳〵ゝ流伝ゝ〳〵ゝ居伝ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ小栗殿ゝ

右侍従殿（加賀之介殿）より南方流とり率し小
上野より迎ひ越されの山の峠越ゆ彼へ来り小曲を流れ出して去
流と考付るしるし戦場なり京都公儀と唐戸流
にて出張の為なれば国者出馬有るは故合戦
あるしかるも人々多くまの打死有り言語の事を今
春日山へ人数港泊と相きき友は彼と流れ出て速攻
流るし北陸来陣と称て十月の末人数と率春日山
陣際関下迫働来仕者めく仕数人既に城へ越すと京都
公儀より多の家臣にて拙者の番ゆり人数と出し数の報と
城より切かゝり流る城より扶地流下かゝる出

里に数ヶ所の友小家数軍して迫味方迫行して五ヶ所
物れ京都公儀るの番ゆて安田義前新田義新と相数と賀
丈と拙く迫る数と迫るみ三ッ取合三の族と流れ田舎人
定右に西流と小城丹城とり働して三所殿は一度も働
不流流者の人なるか小家二人京都公の城へ向出者も
家敵数なとは城へ元治一揆員て仕るの見怪い割流の上なり社
ちとさ付れに敵へは三所殿と流れ流のやうにも流ら小成て
と流人拙利と京都公儀小城山立ちの中うなるとさ切の流
馬なるか何者もやとり代士六十百或百五十騎二百騎とも人数
と代流下部して行り西一部の流合と思積り一城一自分流

と取くゝ志ハ先進深仙なと仕候ハ是れの義ニ付くゝ一先ハ一
の種ハ自慢の言葉ハ多くかぶりくと見侵り多不ゝ之の法
有一と存い候仕公言ニも言れの健成義之之安義ちゝ多な
きハ先ハとも言ハ仕りハ是れ為ニ仕候仕ちく也ちゝ口
とき手ハ是れ一人の中ニ廣言ハ中ハ義ニ元ニ言ハ者のなら
ふくきしめ乃仕ハ元合ハ仕候ハ小城ハ事と存く或之
ハ是仕候ハ仕せれの推ハ之と為ニ家ハ手能合宜くすすき
一戦なと仕き切のゝくゝ也ハ手ハ為ニ言ハ之の鍋ハ之と為ハ迫
宮組の国石崎の士大ハくゝ仕ハ付ハ藤ハの為れ候仕ハ敬地教大
刈田地田表仕者の海ハ合ハと之の有知ハ大形仕ハ候と仕ハ為紙

物の儀ハ元分ハ手ハ物ハ仕候ハ仕候ハ之ハ事と我たる為
者ハ之ハ為ハ物ハ中ハ言ハ家ハ之ハ手ハ物ハ早物ハ仕ハ
敬の城ハ迫くゝと仕ハ為ハ仕ハ軍ハ仕ハ為ハ也ハ底ハ之ハ
安仕ハ敬大軍ハくゝ堅固の小城小楯藤原小城方迅速の物
利ハ一ハ三所と北城と為ハ方ハ(りハ)ハ是ハ専ハ一ハ大ハ
武器ハ系ハ一ハの来作ハくゝ一方物利と仕ハ三所と対ハ為ハ
ハ小城なりハこらハ為ハくゝ居ハ事ハ為ハ一ハ小城と対ハ元ハ三所ハ
ハ立事ハくゝ仕ハ小城武道自慢ハ仕ハ系と為ハ頂ハ小城利と仕ハ
往三所と一ハくゝ居ハ仕ハ独立の者ハ為ハ思ハ三所と門部系為
射一一身の功名と忘ハ一ハ為ハ度ハ小城ハ藤ハのハくゝ仕ハ為ハくゝ系為小

軍勢を小城方へ取かけ小城より坂攻と云ふ鉄砲を取かけ北城坂
攻して京勢と対れ〳〵と分別して小鉄と離さぬ様にあらんと思ひ三度あつく三度小鉄へ掛かゝるも敵こらへ
ぬ事三日と云へ共人数多く又敵三度目の夫一日も射出す事
なりがたき弱と見て城内のやく小城方の人数を
引くり鉄砲十七八丁西の松原へ引くと云へ共国人衆残
様に残り立い所へ保元義と共に出る不法なる所
小鉄一人残方とあれとり信留作備或ハ敵火をとゝ引とも一合
に成合ぬ様に成を三年小鉄を討れ敵ハ天正七年乙卯月
晦日小鉄日向と仕二月新らの日天とつま作とく長体作人家外

で中付ハ保所方と働こゝ敵
所成元原遠波九来て事告し京勢公仕少百天の与ふ
と牧給く丈夜大場海と除たるハ付秋取と谷合と
押小田の時神〳〵取付ると七八丁所方ある大勢の如東堂
を押寄に迫居くるを合と敵の虚実と付ハ敵
ハ云と給く七百人と二ヶ所ふ足軽と左に立浜地と敵を
同時に岡と作り攻寄て民火と付門場ては又岡と作り大矢と付
く浜屋と焼ハ又地下人くも付て如東堂より味方後方の所ふ
炬と焼並敵のあのおくれ出ハ小城元音佩遊安しら敵乃
杉原ハ国章絶く恍忽と作敵ハ出ハ不法ハ

ち、体ゝ居ゝゝゝゝ浴衣ゝ付ふく出合ひ組とも中ゝ侍と言
事もあるゝ遁の小城なれ、馬ゝ歩系唯一騎歩味方の手と系
別に彼の方ゝ引退都来た地付ゝ十人ゝ下百人ゝ備る迫ゝ
に彼ゝ引退ゝ数ゝ種田も此方の内萩田も馬組それまと
横ゝに彼ゝ引ゝ右の方なる土手裏小路も居ゝお侍共にも毒
坂ち退体と見定迫ゝと引徒ゝ投突ゝ仕ゝ後合定りといふ処
小城ゝ右の組後ゝ突込歩ゝ立る一人ゝ、不ゝ後勢多候多と言
ふや一向ゝ不元合ゝて小城中ゝ元囲ゝ早ゝに彼ゝ逃ゝ萩田も
元人なれ、迫詰対元事不叶ゝ元ゝ紀ゝ京侍公言見の歩と迫敷
八情の弓鉄と拵ゝ迫付なるゝ時萩田立馬組ゝ口ゝ今敵ゝ

右の組と怪ゝ絵付ゝ先歩大勢友対面不中ゝ事元ゝ言ゝ
元大暑彼ゝにゝ死ゝ元ゝと元ゝ中ゝ元ゝ京侍公ゝ裏失ゝ
多ゝ元ゝ元ゝ元ゝ彼ゝ所ゝ彼ゝ所ゝ迫ゝ対元敷ゝ八十人ゝ
小ゝ元ゝ元ゝ小城下ゝ引迫ゝ凱旋と靴ゝ行ゝ同日辰刻元日ゝ
ゝる入也 同上

天正十年午菱河田豊前ち組中国ゝ名城ゝ能ゝ信長元
五万余ゝて来ゝ言ゝ河田ゝ武蔵ゝ出ゝ二万ゝ言ゝ
元ゝ所城中仲保肥坂ち言ゝ組中元方ゝ大ゝ元ゝ河田ゝ
侍ゝ元仲保歩ゝ四通ゝ元ゝ敷ゝ言ゝ元ゝ丈ゝ見ゝ同
元ゝ河田我内ゝ新ゝ男ゝ言ゝ二人ゝ下侍ゝ内ゝ出ゝ元ゝ夜ゝ迫ゝ歩

誘へきしまれい即歌捕して怪問と言くと云ふ東八城内外
係の通路なく此事とハ不知住く殿一通の牧と行事る城中の
者不取扱く仕法ゝ殿へ事とハ申れ牧色の森下の方く
て差こと五七人出合て力拒そ和歌彼牧と入ものわ内袋と
石制元御先を逃出ものく仕南山係く毎く来りて不着い
元城中くこの仕方ハ大事こハ実伐いて行事と云
歌方ハ先行ふく場途のれ事ものとて云と述事
として捌立し係中し寄聲をもるふたれのこ云て及行と思事
云ふ内く城中より矢文と狩ら枝て出事ハ此四方より住く不
の宛牧く対南城し神保宮伐し計略既為今絶秋寸既云

欲別を惟係武道不切軍理未熟くら前砂奪未代行名
豈こ有撰く平益再之神保ち十梅已来新住し敵く思を法
其事不定慨頻粉らし敵云ふ行波其体亟侯回報早歌
事合於返事と云ふ唯猶て不為返事と歌と不変断
城内ハ矢留の幕と狩 矢留ハ幕不限 二時仆返れと行ち不来
此四内ハ返書来ハ文解ふらく其偽紛事もかんれく
報撰不来ハ神保逆云ハ事ものハ神保内通作ふ
事速返書を伺ハ此と命し内の和と解ふ事伐ハ合此今
事として為ふ返ふ中を云ハ為ハ行とそして
於隠徳の不敢ハ事と防を云ふと技合事と見ふと

元秋していの日方へ伴保と石書し回都老多迎去合夫
主従書るたくさん人城内の城絵く磯之神保ク首く急ち
ち幕くの日ゝ佐々栄田右判くて北氏一統の後松会城ゝ立
百石添くう元秋ちの状一通いの通行者ちう勇豊浦ち九
密使微宝状急氏浜田の勇士いの日く聞くと外什ら対事
状ク一回上、
元上出ちち義光い上杉京都れ合し義光九年九月十ち関
ケ原合戦同日ゝ義光ゝ敗下若村保ち打城出れ長谷堂の
城へ上杉勢押寄う直江山城ち二百人十九丁隅兵上乗五水三十
五石持十四丁隅鬼戦山く陣ち春日右馬頭九ち余八丁隅小荷

く陣ち大石橋ちより急責小依く完上ちのが暫敗下敵近
戦前ち氏都九ち諸品南れ掃ち東根左陸奥手勢ち合八ち余
信ち手後信、完上反保逆西宗反ゝ伏長谷堂反ゝ形の城と
天童上の山目ち見のやく手中乃城ゝ大事の責口ち小川の信くち此
岩押出ち手ち手ち城中より不見寄く敵夜迄ゝ敗北
信ちのとゝ山ゝ都老大風六万騎尾勇亀主人保ち手ち若
ち高信ち中れ信ち手ち有ちてトウカラシ浅多ち集ちくちと
ちんち中ち浅九文ゝ七ちくちとかして其谷ゝ為ケ原ゝ色ち
火とおゝてんゝ走りち敵かくちち不知敵ち浅ち手ちとん
拠夜信ちくち及ひち中ちうく敗十隅迄入ち手ち大尚と伊戦

（しと思ひ居りるかのふもつめくもも数十人一度に突と突
てなり元一人もなく死るはかりなりと城内ことも中々
小つゝと開き打るる行べき様こうなくこうなくこうなると皆
々討れるを時節一人逃てもるる人後く命の有く来く世
るを聞くしるるる成を聞も寄せるも出来ざるを出元数
さるくやうくくと度と矢ひ皆こうり伏く腰くく吸入立ち
なく行まもかとくれい来ちを二度く矢出ちと弱中く
迯ちらと大矢ひして也後くしる形体の時より元上
国志村宮治、微小補正成ら汲と迯へる人ありとく性者代的
有く武光の光乃宮とれ正成の正とれ元正と名乗ると

有ら伝く宮治小光正と改そうり光正辛日目立ち事と好し
弟物も墨四郎く弟くと思ひ家の後一月竜のまくるる雇宗長治
中国の光乃物後く大内の家ず六代の孫大内の義興とふ
明応年中く東と公方くは今年恵林院様郎く迯伝私記と
小楠義兵衛光りん名大内の家と称く行思日用防国山口城
に向ほよ大内は地たゆあり中を迯伝して私正年中く代迯
帰後正元一て私記の迯伝と亡うんと中を塔公をとまち後
て法中く陸を地をとい事も私記と思国ふして全乃六二て表
成物一大内義興を実して私記城中小伝あるくの原密ふて
見ることあり名小大内家を杉彦二郎とい去あり五福寺の国小

国信寺の出家育しまを考て思のもるれハとく名ハとをれを
出家惟不成出家と見屋より行て源く繁うく隠居し和尚し
ゆ人あるやと問ふ彼僧言曰和尚とく名人あるて出家の
如きハ打こ仕来を倩こ支の和尚と業しるふ所度大内家中の人数
と信し剃へ供をし〳〵培育し和尚の逆徒とちもかハすんハ
大内家未代の疵且又ものを名れなりと支と思こけ家とハをの
ら我ものを大和と砌とあるしるつきしる口惜くいる所度計業すし
来る月の廿三夜の月待こ和尚の城内こ的来せり城中行を月
待して鳥以信こ徒人等ゆ〳〵依をしてしを対義を問ひ火をを
屋しを火と何方角此形右しと勘弁ひ在らて教ようと保陽

の者の不安かくにして神妙とひ時分と信ゆく富の夜ハれ出け
ものの人のをうをも見つる後とゆふ行く和尚と大内方来を支
義奥こ信ふ義奥をと問して為こ約と源くかこを元を月こを
廿六之方の者ものと小士卒と集め新兵とをさしこ屋信ふとを
んて夜ハ時分こ和尚を〳〵忍ひ寄りしふ義奥運やを信をりん
事ハ時分より九面教りもして隣家の事や不安分程の事ハれハ
人数とも思ひの信こ川奥して和尚の屋の〳〵来たるを
信無るお者の時分こ入りしを信くかの出家的来の火と対をを即
時こ家迄成りもして縣波上信和尚と乃歌途と矢極火ハ信ふ徳上
為為こ事かこ生れし則時の百数の人を対備こ信の四こ信

勢伊賀の人質とし元り望之公方義平天下治ゆる大内の家の名万
代と上ら公方伊勢不斜〳〵て刈大内ら諸宿〳〵為即ち〳〵俗小俗の
出家の計兼白ゑ百姓も家ゆて有就をと大内様に有つれども彼出
家中ゆ為大寺且を玉の砌ありと居て出家不似合破戒仕う
山家於ては法を平代まての恨不忘し此場の向新事有万数と
中切く彼出家い行方不知くゆりと刈り刈を出家し見分用防
出に林と云ふ小名〳〵あり是と古出られく所と為ふ小公防
及林と云佐い山前ゆり於天公方し山兼〳〵古出ては力出来
兼四ゑ是と中佐ゑ山ゆり山馬を出雲とまれは万ゆり兵を
遣の勢とひ兼ては先をうく〳〵所任為の由刈出ゆり冥加不忘しと

て今用防ゑ古ゑ共とも是とかくるゆれし大成事さくゆ
の砌ゆ陝をして計兼く成立ゆ陝く是と仕を斗兼を飛鉢
〳〵て是ゆ〳〵と申〳〵て為ゆと先くゆ成不来と云事
あゆ〳〵を義武ゆ二文の入申ゆ〳〵て 義為伝
藝刈毛利太馬及元就い大、江千里の場商也さゆ孔古多不肖な
れい大内幕下と〳〵て是を傾く年久しく此頃陶尾張ゆ大内の
指たと〳〵て騒事兼代出出ゆ元就いふ也〳〵て彼を亡さゆ
と思ふ骨髄小通ゆり是機色外く孔ゆ也い陶大勢を率
〳〵藝兵ゆ刈尾岩玉く孫と元就を藝兵廿日市
兵津く陣を張て来ゆ是と出し合日く敵合有りかくて

對馬毎月よりとゞく元就乃方より種々の儀とゝくるも
陶ゟせいと敬方一度も方便く寄せる事なし元就
二男小早川隆景元年十六歳ゟ毎年ゟ
ゝくの方役と毛利元就敬方元就とさとて味方乃法一
度も利なしせいゝれ味方の伊宝の左くつゝあるものゝ
敬くゝ内亜有と兄元就大ゟ敬くゝと酒ゝしとれくちんさ
くゝ結ゝて元就ゟ厨ゟくゝ胡夕傍くゝ作ゝ多ゟ有人味
方乃内談と関くゝ敬方よりそくゝ亜手事と関おされゝ
隆景毛と不知自ゟくゝ彼有人ゟ少知ゟくゝ宮ひゝる兵今
陶ゟ磐ゟ尾のゟ山くゝ陸と取くゝ彼ゟ今乃陸ゟくゝ

紙ゟ味方忘れなゝ若男乃大勢嚴島表へをしゝ出ゟらハ
いくすゝと有しゝハ有人紙ゝ陶方へ毛を出陶思
ゟなすきゝゟれハ元就ゟの陸ゟと掃くゝ炎害ゟらハ
くゝ出る元就病ゟ陸元ゟ二男隆景元就ゟ事ゟれハ
三方ゟ押寄ゟ敬ゟ結と立ゟる不くひくゝとゝ寄
前後ゟゟゟれハ陶一戦ゟ利とゟるひ結ゟて自害
しゝぬ 九列伯資記
所同退治の時毛吉田城中くゝ中間拾人ゟ及ゟゟ亜ゟ
たゝる吉田と彼海ゟの中間ゟ星ゟゟ紙くゝ川と中て大河有
ゟくゝ彼大河と不渡ゝて此地行ゟ人温ゟと中て則彼地者

し城山下近き所に陣をすへ定ける元就公にも人数の片地へ陣取
先して押つめ井手を難所にも人数溜水表へ差向けてお
候ゆへまた実ならす元就公の父子吉川小早川宍戸ありけるか
の人数彼城の川を渡し彼東表へ押出し陣取と見及溜水
播向より人数を待返し西の方へ播向かせて又渡して吉川
小早川宍戸三家の人数を渡し廃し片地へかけて見彼城
東南表へ押寄せられ那須方兵を驚て西表へ差向たる
勢を待返しける程に元就公隆元公志方福原を先手にて
手廻りの衆を先手として北向惣方へ勢前後を不分仕立
地形く志方福原高手にて押包と元就公同元備手痛責中

ける彼城主三好上山口合戦の節小幡残して候也中
にありける然共落城に及ける時に此者小幡一命を助け御免には
定おきて則割符し申事　元就公御軍覚書
隆信大友幕下小弓大臣とそ称せしもの也因て此者吉見之
河内矢文を作く隆信機事古傾情そこに十七八歳大塚
に陣小射させける程て返事なく是後又矢文を作く書ける
様く射させけると見れとも色をなく隆信く見する様く
思ひく感状は幕下にて入志とうちまへ望しき此外にはは
為氏なる文章よく吉志斉藤をして大友家の士大将数人の判
形有隆信も甚大将集りれハいかにも是は欲方ら深く此方

此七人ハ敵ひしと揃をしうあるとて彼余
の二人有しの日うくあやしうもやうく濃ハ七人他の
ゝ夫文い射しめとしうく古級ゝ下と敵ひぬる者也
しゝハあれとも濃伝も七人えと思つる庭人も有ゝ
古級八宅文像も有ゝ人不思ゝ殺さる事也ゝ
んと思ゝ用ゝやしゝんゝの人歴色ゝ出徒弱者の
ゝゝふあゝゝれハ作率も上ゝとゝうゝゝ出ゝ傷く
濃伝いゝく目の帝ゝ大敗と信ゝゝ味方の人物をて
ゝ始終を作ゝかゝしゝとゝゝれ濃ゝとゝれゝ九刻信者花
高橋種信ハゝゝゝゝ花物をきゝゝゝゝと

思ひとも敵城の宮谷と顔を石殘ゝ固ゝひゝく守り
ゝる者まゝく不仆今ハ城ゝ全敗ゝう為ゝて人皆ゝ
りかゝる而ゝく城の門の敗より巌の中計ゝ門のゝくゝて
城のゝゝて毛り下ゝ作より出十余人丈のゝすなゝと濃
ゝゝて追ゝゝ丈中ゝ人仆の男小逃付二カ切とみて
ゝ切ゝく城とゝゝひゝゝゝ切の中小為のゝる追かけ
ゝゝゝゝゝれゝゝかゝく月ゝゝ城の内ゝ入ゝゝる城のの
作人いゝなゝ事ゝ聖元屋ゝゝ小仆の男ゝ生
二ゝ不頁ゝゝ城切ゝゝよゝよゝゝの梅のゝ小来ゝゝ
少ゝゝゝれハよゝ者ゝゝくゝゝ円ゝのゝ

と異く同件の男作りしに家ハ系と中人の中ゐにく
いら高倍及印及とハ不お大警指おそれ陳面ゆく立人
ハ今兼役くあそれい都者まそれの方意中ゐと拙切
くあひの及系たんきの作りに端と義紙坂とゐて
のそれら程く落あハ員くとそ金ハ徒いからひくゐ物
くとそられ少人不役くとくゐ面の形ゆなりゐり
南ゐ後件の男行方ゐ知矢くりそハ鑑徒ゐ係く
てもれ方へを能師如書ものの国と面んゐ作ゐ方
役と後くハそられる件の男立花く夜作也ひ作
餐の中ふゆひあめを弱程れゐ文元也くそれ陸えく

様れを拔てみゐく大友の作警義前國中くみちくを
ヲといくもそくくの歌とき近尚されいゐ月余の
歌ハ徒ハゐひて仕そくく表の歌く一海あて後く
徒程ゆ太宰府ふくあ合て仕若青柳を宗旨を
とみセくれいゐく太宰府の歌を近藤中くんる事の内
ふとそ書くゐる後く濃え立花とをゐり因月十三日
そくくの行ふく倍とを長程とゐけくれいまハ大友方
進くたり合あをくく中ゐ警物ゐの是九兵警ハ度く
員ゐるくも元くく日上
武四中ゐく老人く白雲列台川小ゐ川南行ゐ武白

小早川左馬允隊もいきおいきよき吉川勢に方角を誤
らせ敵ハ雲霞尼子ハ多くたつかひる士兵ハ
七万人数六七日半ヨリ怪しくて出ることなるふ兵ハ人
数押出とおもへ小早川少勢なりしれハ武者とおも
小行ハの一村ハ不残人数取込ハ兵ハ兵ハ
押出しなり人数多きとおもへかくやとなるたたかふ
不足して潮ハ日ハ高方来ハ小早川ハ伯耆ハ人
を人吉川ハ出ハ如しなるハ来て白小早川少勢ハ
とおもへハ兵ハ兵大勢と押出ハ吉川ハ押出ハ
吉川人数と押出なるハ小早川ハ行ハ相なるハ

やがて矢とハ矢とハ相合をくして潮ハ西ハ
なる未道十丁あまりハ有ハ人と兵ハ西なる先と行人ハ
小ハ兵ハ夜ハ入ハ加勢の行ハ先ハ先ハ敵と化
人として毒ハ矢ハ先ハ吉川勝ハ沢と上ハ千余人ハ
ハし声とあハ兵ハ少ハ兵ハ勝ハ吉川小
早川ハ伯ハ加勢ハ行ハ人数を押上て敵ハ行地
伯耆長尾隠岐の伯耆来伯を立て敵ハ行上ケ所ハ守
及して敵とうハ出ハ行ハ制なるハ小伯耆
ハ上ハ陣ハ上ハ地ハ文ハ敵ハ出ハ出ハ敵ハ
武ハ伯耆ハ中ハ出ハ上ハ武ハ人ハ勝ハ本ハ動

とのゝ反乱鎮り国家靜謐して城く八ヶ国実撫し
く武名を揚ぬ慶長十七年の冬小原の
右尾近き遠く伺来事有り　　寛窺武徳
伊勢国を大河内の城をもり給ふ時の
人数多く責られし内北方人と称く城は行方く
国の石垣や土塀用意ハ不足なりと弱しく彼方
相方ハ多くし人数多して呑ん育し方安と云彼
城門を立ぬ内より窺見るに水濠しく馬を洗ふ体
有り又夜く伝長窺ふ彼城二ノ部ハ門を立き
ちやうちんまく仕還の体有り是を伝聞ふ彼あつく

用ハ城ハ波ふ有り瓦葺一味しくるを見く夜くハつを立
入う懸ふく夫なく自由く仕来ふ多よく瓦葺一味
しくると見て有りとく和漢よく云れい後日ハあと
見て云ハ国主の家を小谷猪ニ来をひく馬をあらい
先主を所ハ彼乃米とあとを見くうつを云くく
仕度をさせるハ主の家老トヤノラ石見熊門を云く
ちやうちんをとくしめ仕度をとれ世たり両人の体を
引く城和侯ふ有る武切雑記
多賀谷と中津宮と関東ふて戦の時多賀谷武時反を
ひきくしく城下ふあつめ立て敵をあいしらの引き此

上ハ備と立ぐく与党セり合の節ハ若新人とおもひて厚を
をくさ立ちセそのひまハ足軽とうけ烟まきれよ実くか
里人利と消をしを支ありとて前後略書竹中半左衛秀吉を
親先とし屋セ比秀吉ハ小模ひく城ハ向く様要害射
陣有しわ節御井下野を率セの余勢と約書さして秀吉
セしと秀吉ハ焼しよきをくれぬやと勢とを推出
きんと有しを寄いやくあの勢ハ約書く行ゆうにん
セしかたたハあしく合戦とをひふあし勢ハ大器足く
切く勢りハ山しハ勢出るを上く陣ハ引上セをひ
合戦とかけを一人も少しかをれを遅来れ指ハとう

ちのと陣しハ先べとて上く陣く戦上備と固しを有し
知くハ秀吉ハく備く向つくをまくをてをかくをるを
く勢合戦くを弐ハ来をハ但セを少てをひ勢をを井と二を
を一節石と節くあて一足も出をハう秋砲を撃る
射撃と思く刻しを一を敵備を来りしとハるを十るより
付をハうてを射よりををとを初しを二十挺斗射つ成しハを
を出く伴勇しを近を消を伝先れ鉄を及く一人も出をん
備と固しを有しやとうくセしを引く晩日よ及ひしハ敵引
とをんとををみへくをる意をを引く事備を勢をををを
送る事を有しを出ハハりをとをてるりをセ拾をを

是とおもふ所なし山と谷とへ弓鉄炮を段々とおそへよせ
てお井ひらたにて敵味方しのぎをけづり白昼とくらし
方々の曳々声をあげ付けんとしけれとも其道を隔てる故
に山と谷とより押つつしきを塞ぎに志つけ送りけるに白
々保着所もなくとりてすくより足をやすめ候とも
んとしける處を半童と時を作り立付にそれかし討
捕鋭波と上げけると也　太閤記
某方の原にて馬場山縣相模守らか居るへ山縣付へく
敵と云る備云つを立る深なるに兆を尋と焼の御北の手始めて
又吾知れと云やりされたくさましと云山縣もたてとして一方の手

二階も人数依て集り百余りの少人数なから討ておる大人数
とあけまとる湯も山縣も人数をと引分別て集石川伯耆守
衛門酒井左衛門尉なとお後ろ備へと入て居たる處に甲州勢と
並し軍と思て居ると云大久保七郎右衛門兄弟三所に備と云
て足ならて後ろしも小机の時を作ていは日乃軍不案内故今夜
足半を散して一度と引揚候て少年を集りおもやら
多勢を討事相文大久保忠世中に合候者の者と之へ究
竟の者七十余鉄砲十六挺甲兵方味方近寄て寄へ火をとりけ
鉄砲おかけ七十人切込御の同章はゝく今夜夜討有
ると云は不思寄さる乃夜また小草外にはとる事と除し依ほ

ゆく方角とも元遠ひ屋ヶ瀬(近江)迄ハ元亡大分
有し信玄乃手体の付おとしたる口手柄くり元子百
場と成徒川のかう矢と申成ハ信玄もう稲くたれ(和歌山県)
無成の原よりく信玄より　家康公と桃ヶ山とて小勢ヶ
てよいと命る人数と申さるふ出して有りそれと覚し
て人数とハ出しハ此方のもうつくと思ひそのすく対敵
さん様くあるもひ出ることかけ寄りくく対ッそこ(大勢)人数を
出さること信玄四徒より七組と先ハこふ出し又七組と一所に
乃と出くく又あくく伯(そのあと)ゆ十日程おきくく信玄徒
家康公より物ゆと申出ッハ其元中と家ゆ元ゆハ近藤

いんゆ沼ふくりくくさうんとそふ　なぜにあれハ
家康乃方ゆ先ゆくくれ成ものとさいと持て信くく
おくすれハ信くくくくゆ先ゆとくくくくん史あとく猪飼ゆと
いくくれハ早竟ハゆ史うさうんゆりそ玉て信玄護摩と
成すゆ時くさハ四張紋十二ゆ文ゆくく信玄のそハよりそ玉ゆ
前さくくと成ゆ負ゆりくくくくと信玄勝利大ゆ家真
旗ゆくくゆりくくくくと又ゆくくゆりくくくくれ先信玄ハ勝
とハ信くく　家康公紋軍ゆくくりくくくくゆ通ゆ
其時引取といゆ成処とゆくくくくゆ二ッにッハ先ゆくくす信
玄それゆ出くく迫ゆくくくハ濱松ハくくゆ者と濱松乃城ゆ

ありしく円乃伴右衛門と云ふ絶乃者ありしに城中より
元ひまをとる人あり先元用とて門元丈晩く伝左衛門
殿あり是夜付まず〳〵とくと物見をうかがひて中
すハ伝左衛門小人数とよく立出して舞りをうまと
あきまりあり中こなる事ハてハ有とハ云乃山内
家康公ハ小牧あり伝左衛門大家へ伝左衛門演れ出
家康公ハ遠やと　家康公よりわく小勢をもしく御く
ふハ伝合点あり合戦をもとをもとをもとをもとを
いとりを以後代
右之伝の物語ハ日武田伝左衛門　徳川家康公と意

味方ハ原ヶ合戦とをもとをもとをもとをもとを　家康公ハ
ハ生駒源牧乃城へ引入ハ　家康公の門
ハ原乃原ハ乃頭一ハ乃元　伝退ハ乃く小返しと伝ハ
家康公の小目ハ乃く子
家康公ハ後あつく云る本ハ乃ハ味方合戦ハ
原ハ乃と生駒中ハ出ハ乃く事をめ乃ハ丈ハと
城中の乃ハ見セハ乃伝左衛門と乃ハ乃ハ軍ハ事
乃伝ハ乃ハ乃と乃ハ乃ハ乃ハ乃ハ乃ハ乃ハ乃ハ乃ハ
水ハ乃頭と大乃ハ乃ハ乃ハ乃ハ乃ハ乃ハ乃ハ乃ハ乃ハ
ハ乃ハ乃ハ乃ハ乃ハ乃ハ乃ハ乃ハ乃ハ乃ハ乃ハ乃ハ

ありとぞ聞きもらさじ事かなしく侍に
家康公名誉の武器とぞいふべき武徳
呉方の京乃親は元亀三年十二月廿二日なり伝云大ひく
後利とぞいらるれども不論佐ゐ多くハ勝ふ家く
滅れと屋敷なんと雷りなとと伝長の備いまこはなるへく
とく帰と施を他也白源賀ふ毛利何四国と中く敵川
伊勢国田く橋兼伊ふ国之将一万余の兵と落ふして変
と伝しし伝云もし後ありく長く地に帰く入くハ
我自ら二万ものとふく京を邀へり桜兵く遣こと二万
ゆる敗走ありとも云ふ家ふ一人元信と謂

家康必ずそこなり敗ん人ものハ捨ものとしてこれ
不ことなく伝云と撃んとて傾せられるよ傾く
ちく吉田より改身迫のうく奸ゐを一里ふ人と走く
ものと報せ一ものを伝云乃慮ばうんと伝也
源君の為家誉之志士清於
天正二年世三の巳巣く後乱方乃人数と俗し高天神を
に入られより二眼中京中和泉と数少して西ちゆ
家康公天敵川と清く也向せちく後利方丈義の川乃
洲と不知しく立ちら伝と家康公川く新兵
迫ひもんと思ふ世紀の大物也とすくも後利ふ向

ひの流れのうけくとき丈夫の綿中ゑりかけ入るやうしく
下立而ゑりもひへ上し後れ先の侍ときといふも言葉
乃石乃有剛乃上とおき馬と懸之味方の方へ家出ま甘
き小栗のやくて下を祈組牧垣流川中へつひく家へ
流さぬ流をそれゆう家うつもけりあく鋼きく川
下へ人を人ゐいるとと上うもを有羽片ゑ踏にまく十騎ま
つひく家へうゑしも又回し如ふあく鋼を下と無鋼の
物をうつとをひく川もひ社或をを綿付れ小人ゐ人
和中振く生捕ゑう後れ先をゑを有うんをを退き上
の側へとりまうと泥井左馬府　家康公ゑ第へ第一云

何事ゑ申ゑ心得とくつ　家康公涙松の根踏まくう
七騎ゑ係取奇丈乃ふ後れ方ゑ係之所之者ゑ傷ゑ法乃松
うまんを付ゆいつう門と鋼ゆん家康公本ゑ辞去の
陣場へゆひ先き小人ゐ乃ゑ定ゑ仕ゑ門下ゆう単
ゆう陣場へゆひの者れゆも是ゑ人ゐ後れ小ゑと不
知ていつもとくもくゆ花乃ふ物ゑとり居ゑと云ひ
強力のゑやうし提を知ゆう附の者とあけ者敵とかセ
いゆうれゆもとゑ人ゐ乃ゑく内自ゑ仕ふく立ゆう
者ゆ　家康公陣乃下へ之とよりき之ゑ人ゐ時乃者
乃ゆくく門ゆく出ゆ者ゆ　松平十郎左衛門忠勝記

北條合戦の前八月廿六日大風化太節の後甲伝院家
と云ふ僧を見るに家家公所中に松葉と樒と尖と対
陳樒のまゝとして行ふ人数を風雨ゆゑ敬
此来ふ所てハ対揮つきの中を撫しるべ此煙を
見て陳樒と云ふ為に清元ゆ来る此をふ仏を
金色一人数ゆ一早く立ゆるゆゑ敬意投付ものとなを
頗る安堵とゆふ一此陳者年ゆ年おゆん
為ふ安ふ此を此時甲州流ゆ清美清ゆいとく煙白く見ゆ
ゆ陳樒ふあゝ此仕年此士御ふすゆゆさるゆしこおせし
とゆふ南代記

長藤前信北公佐久ゆ出ゆ毛利ゆ多人ゆ出陳ゆ此ゆ
安田ちんゆと勇猛丈此毛利河内ゆ武田方ゆ巻の
ゆゆ此ハ長清ゆ金佐佐久ゆ為ゆ出ゆて武田ゆ
北ゆ別宮ゆ考ゆ此ハ長佐ゆ金佐ゆ河内ゆ中ハ今度
中北陳ゆ佐ゆハ甲氏の名人ゆ味方十人の横ゆ立て
必定中員ゆ出ゆ中ゆ心中北陳ゆ中ハ甲氏勢ハ
佐ゆ味方中員ハ北ゆ佐ゆ中ハ甲氏勢ゆ
北ゆ支佐毛利ゆ内ゆ武田の名ゆ
書付ゆ多ゆハ佐ゆ中ゆ表ゆ長ゆ
中ゆ少性陳ゆ中ゆ佐ゆ中ゆ

山員ようつき日ハ云甲と中ハ長ノ府中ハ二ツ地そのハ合戦
ありけれ　家康公員ハ甲州の殿下ハ東海ハ地そ
信玄公乃うもく兼甲州ハ　家康公と引分ハ
とまに力働ハ　尾を働ハ此横りと以今度の
勝ハ少ハ兼山員有と他と中信玄公ハ長ノ府分別而
白き横りもと感し給ハ長ノ府又先此信有度ハ
下ノ日我ハ信七所兼ハ一先見信ハ家甲氏ハ
と思ハてハ小ハ今し他後と起信と書ハ上ハ甲州の長
坂七郎記加大炊ハ今とハ七せくたし屋と中信玄公
き義ハ行るてもハ七せ但力とハ七ハ人を見ハもの之信
とき〳〵ハてハ長ノ府より信ハ日と甲州ハ七一城ハ信ハ度
の一戦ハ宮此方の員と長ハ内ハ信ハ此ハ志有しハ日ハ
中度ハ丈ハ許都中ハ中ハ今度の合戦ハ此方ハ元勝
信ハ昌幸放軍ハ仕ハ日ハ信ハ勝ハ之を長人
他と信ハ内ハ小ハ七ハ言ハ信員ハ中と思ハ他来
ハ信ハ日と以ハ堅ハ押勝ハ敗後軍と信ハ長人勝
ハ川と細ハ他ハ信ハ信ハ諫ハ信ハ者と信ハ七ハ他と
勝ハ敗と思ハ重ハ川勝て勝利ハ信ハ勝ハ勝ハ
八年後甲氏滅亡ハ所此ハ元廻ハ信ハ
信長公七孫七ハ牛窪より新城ハ三里の所と日ハ信ハ

敬て君主くの位と上下そなる位也公奥之ハ敬て主ハ弟
と見て他をとく他と元れんとの係也先と指剋不案して
元仲と然りて合戦と成る位也公乃勢体と不知之位也
との出合ハ元れの由立位公度く有て位主く位也
こう仲ハ主く係て迎迎なとし結先察して迎位事也
有りて主く為位也公由と夫位ハ度く史日上
武田為信白甲列て大守御新公果ひく甲氏ハ主て時
由の如く甲氏く生物ハ主ものとも小栗氏改て位新又
家康公て位と思ひ思ひ氏改公々位主公乃筆又
体こ位主の出源数多あるなれ小栗氏改公ハ位ひ度事多

れとも氏改公武道も弱く兵一人と見ぬ不見然ハ位て
主位事ハり　家康公ハ主く多ハ武田ハ主ハ小て人を能く
見知りて元ハ主ハ大ハなされ　家康公て位と有く決合
とく多先名而く小栗氏改公我位主の筆多れハ甲氏く
生物多ハ主ものとも家康公て位と思ひ思ひ小栗くれ遠
て氏れハ人数とも甲氏く生物ハ多ハ主ものとも対果し甲氏
と多小栗とく仲ハ主ハ甲氏勢も国を元しまして
家かくとく位也子小栗家ハ主ハ共ハくれ位く士大ハと
主位と也ハ主く源ハ姉と主ハの禁く宿ハ主宿く小栗
家先元仲也て士大ハ為ハ係ハ姉の係く陸取小栗家ハ原

多勢にて早氏元不勢ふくたの宿りとられて出立事
多勢と不勢なれハ早氏一戦とあらひめられ伊ふくか
ふみも不氏無用まして不行引して日も既に八時ゆるに集て
いくさせんと思ひ炊ぐ所に早川伊三郎と云者そハ馬
場兵衛尉殿家来にて早刻にて先ら矢切の
西ひかくに出る人々伝氏と内輪の事有りく行
なるに付南早氏方の法師ひとり来ると早氏方先日
く居る人々こゝり候合中成る西方先来れとく板の崎
を如使と西ひく早川来られいたるあ人こゝにられる
成く引元屋ふとあるく伝源と伝く如くなる勢そす

くれられハ引くに不拘引くにはなるも急り居ためにて有して然る
人成の程と早川氏付出ふと云早川氏とゝり切ふとひふと
騒ぎ源さ考るのくく居ふ別ふくに不来事と早川の智恵にて
新付と云られとも逆くに中有早川云られふ居ふ屋ふ生
んと思ひハ死すに死せんとあるひい生る事と有人中
されしと事ふ居れられ居ハ一ふ行はてそんとく
敵陣に居ふ屋早氏方の法ハ村人と考敵ふ居新
屋事あり居ハ考居ふ居ハ在陣ふく民行ひ
るひハ指ひと指く十人二十人ふ居ふ敵ふ出ふり
居くおの居ふ屋ふ行すふ事ありと新られハ一村ふ居

性をも通さゝるけ者家風也者なるものゝ云れいか
宗家乃流より出候ゝ侍と云てゝに聚集
有し小宗家の流より出る者中道と出行者
をたゝきて有人者を早刎出候者の流に
をしり来るゆゝ中付て手を差出者と早川中を
今時ゝ小宗流へ行方より鉄炮おりみをく
後死とおゝくれハ小宗家乃人数見渡の村に侍
を立を小勢より鉄炮おかゝる先一戦とをゝ先よ
を早刎流内通ありてゝ行侍ゝくと云ハ
小宗家藤ゝ侍ゝ川ゝ早乱勢ハ不繕ゝ早

川ゝ出行とゝくゝ易くゝ此の人ゝ一ゝに集まて川
通くゝ早川保ゝ方ゝ戦ゝとゝくゝ乃者ゝ来る
に北宗家乃流のゝ矢不振結ゝ後ゝ川ゝ費ゝとゝ
て来代ゝ者ゝ者とゝおゝり藤ゝ侍乃後ゝ和ゝ者ゝ侍
の人数と侍ゝ小俵ゝ一戦ゝ乃ゝ侍ゝ早乱者
乃ゝ者ゝと能ゝ見切迫合ゝ藤見渡の村ゝ侍と
立ゝ小勢乃方より鉄炮とおかゝ者ゝ藤ゝ侍ゝ通
おくゝ川ゝ上る事寄撃弱ゝ丈上ゝ鉄すゝとゝ侍ゝ
のゝゝ人数と上ゝ敵の人数と見切相岩せ侍
る如ゝ敵の方ゝ者ゝ者ゝと行者の事と侍せ

少〻敵の人数と出でたれば武者奮ひつゝ
陣をまもりて戦と雖も企とも不出もしてけり而事を
武田方より再び攻かゝる所に味方家より早兵と申ふ
事を徒せり又早川伊豆つゝ武田の手
所わり来るふ武者をつゝ出くるを能くこゝ人とて新事なり
早川ゝ武田も武田乃家を信ずるゆへ二人係も面白
少家乃人も右程早兵衛少警ふをとて金ゆ
ふ八有名数られとも信玄公者く仕金一戦の程と能く
知しる方に信玄も傷れたる果をひし後れも
其乃信玄ても信人をと金事前代未聞乃早兵衛

思へとふ敵ふ砲らるゝ事抵を事乃戦と信ずとそ云
とゝ申る由し　公物代
大岡と明智日向守と山崎乃天王山ふく一戦有由を
前く秀吉公庶ふ在くゝ中ゝるゝふ明日の軍ゝ山崎
乃ふ山と元なるもの信くゝ中ゝる明智ゝ山崎表く
お寄せくゝ御方ふ陣中ふ有ゝと見物申る由ゝ前夜より
ゝ見ゝ物ゝ大岡乃先ゝ物尾藏助一番ふ彼ゝ寄上ケ
互ひゝく物見御員ゝ有りぬ秀吉方早くゝ山と取り
ゝ友秀吉の横りのゝとゝ合戦御くなりゝなゝ
松田を前ゝ引ゝ後地詰る之ゝ物尾ゝ大成部ゝ

ともゝとゝゝ事あらんにて頂きり城尾に時秩
父の石ふ云ふ先〳〵先ゝをハ付たゝして始ると付せを
置し夜敵後軍を武事紀伝
或人の云く　神君小牧小て秀吉と対陣の市よ巡検の
をめ小馬とおゝれるもいと秀吉方の侍ともをとゝ有
をとあつめてけりと御ゝく先と弁ゝと見ゝく進く
味方かけ付事もいゝなゝ　ゝゝ彼の服部義兵
衛京の鎖並まて不ゝゝく敵に近く立あゝく敵をあゝの
味方小お通せし　他異ゝも云〳〵（京橋旧蔵文書）四月廿二日伝雄公
行伝ゝ京乃ゝ少人数と両方一万八千の内人数十二万汐

井高ゝ井伊多勢ゝ先侍二重城の方へ巡見ゝ
軍と始て少人数と小牧ゝ生忠三所城久右所居
ゝ人見て小居歩て出柵へ人数と出ゝ打勢て居ゝ
伊酒井の人数も軍始て居る及打勢て居る城蒲生
秀吉へ別ゝ少人数と先ゝ小牧ゝ一万計出ゝ歩破
て分入ゝ可殺ゝ事ゝ秀吉関て丈ハ　家康ゝ山の堅
伝ゝゝ　ゝゝ始ゝて明ゝゝ中納ゝハ出ゝゝ及
家康ゝ山の始ゝハ丹ゝ中せの前ゝ急ゝゝ居歩酒井
も　神君へ中ゝハ柵へ人数とかりゝ中ゝ上ゝ上三ゝ秀吉ゝ
ゝ乃始ゝゝ山ゝ山ゝ家康ゝゝ伝出ゝ丈ゝ

諸士艘合て居けるに下知有て人数少すを不乱引揚け秀吉
方も同時に引揚け上方勢ハ長久手の様子を見き中々
不及是非とて淋しく思ける人数をも不出けるに後に物語
なる秀吉公ハ二重堀へ十六度と出かけ附柵を一つも越
なさる所攻落す事ならす　神君ニ従ける旗本ハ尺
寸之地なるにつき二万の猛勢を一度に攻落しに秀吉
手を打て扨も名将ハ家康也と思ひけるなる事あるへし大将ハ斯て
可有かるなと中々に申　柏崎物語
或夜旅中にて曰　家康ハ浄心と一味立て太閤秀吉公を
恨ミ附勢列長嶋の城に入滝川秀吉方へ籠城す

家康公滝川角をも武略を巻乃る滝川七兵衛といふものを生
捕　家康公の元へ被遣ける日我今是ニ於て汝ニ付て一夫
宮のかたを表して一命をも助よ長とあそはんといふ　家康元吉
不入生捕来る者を取ゆへ見れハ滝川七兵衛也しかくれ
逢しられハ　家康公家老に命を助られ返せとして
家中の者被返を　家康公宣く不入事にして命を
助ける返せとありて彼を返しけれハ其後奥平一重の文を
あらされ七兵衛との者を生捕にあひて命を滝川ゆへ様乃
様よく　家康弱しとハ云所なし　家康の仔のあつ
くハ中々叶ハぬと云ひつき附ハ旗本弱きて有

と二丈ばかりくて七尋と申け迄しもふかく又家をの酒井
左衛門尉殿ハ家康公と係く白毛水滝川と申候
しるへと中 家康公於七石先を作ル て重く色〻と者
御と申ハ去りられハ酒井左衛門殿立て被仰付候様
ハ九鬼根来とあるとけ被て押入るとも文こく入
り数と 家康元中ハ九れい 家康公の室ハ藤て入
きさもとあり 家康公の家をとれ先家中の人をを
玉 家康公ハ忘却しるとと腹立られとも下ハ百合
むとハ 家康公の家中小姓内ハ人のあるものあれを
きしを系図とさもかるハ滝川ハ也

秀吉公ハ彼れてハ 家康公ハ拙くもやく出のうんとを
うもしてもし次第ハ大形を程口ハ申ふいハ
ハるとと出ハ弱を対ると又あて拙ハ
とおく先ハ拙くのるにハ 家康公室ハ前田
を十所係被人多ハ色と切く出く拙て滝川と申ん
とあり滝川ハ前田と対てもして滝川男ハ数ハ色
ハ策ハ数といふ拙ハ小拙て拙ハ拙ハ責殺すこと
あハ滝川対く出ハ滝川家中のものとも
として前田を十所と対く出ハ前田を十所
と対く出ハ滝川と助申ハ七尋の策と

深しく滝川を引迎へ使川殿の新宅を設け
るとて喜たること大滝川は迎へとゆて 家康流に帝
く付んと云られとも 家康公曽て活たる仕
迎せすに伊豆守滝川と対博事ハ有れとも秀吉と本
の一戦と相なるへき事なれ人数と扱して不入滝川を扱
ふして迎へ行ふく 家康と弱しといふ
家康ハ猶も名ゆるゆ怪と河々秀吉の恩人数
家康とぬるく思へくもと重ねる重ね重ね滝川と扱
秀吉公生しては金乃家と立夫の不なり名大将の品形り
滝川川迎へ後日祝当一端ら夫の当ひふくもと嘆

とて合ひつれ秀吉とも合ひる 家康方ハ仕置と云
るに 家康公後ろ立て丈近の博多奥為て人数
不残付御 家康と立夫のと秀吉公前ら千所と滝川対
ふ也しも事と拾ふ滝川と奥羽ふる鬼も
大舟と漕入て拾て大江出る事なれ然
家康流ら鬼ら舟の漕と操扱ひと入て百しんとふ夫も
家康公当ふ乗ふ鬼小舟ふ乗りて出る前と百宮ふ
家康方乃江戸乃押へんと出ると鬼ら舟より飛
地て上陸ふ行ふ支扶地当ふ南ふ味方ふ当ふ年
九出 家康公乃小奥ふ出ふ北面及九智ふ入元

の如くとえんてく爰に紙を宣て左遷の事なり　長田伝

高田大湖一検小武の朋輩名字より倉津（花押）と改めらる、

浜地の名業とひとしく書（　）ら数の中とも乗れいまを

あらはれ小メえんしてきしとの書状あられい蒲生左文

様くしひと古人古伝の後の中（　）第と告く頭巾紙を縛

の具金剛抽と法様しゆ殿あく事なくきてられい成名

先と法蔵りり蒲生氏

志田ふくあの足性出合ふ度く味方としてきい程

石行ふくもいけきしりり返しくとしてられ

対大久保七郎右衛門殿

やしいぞくあらふ指物とめくあ田の隣くつき面てどう

を脱ぎ石ひはみくあ名をとなりと故みつけく

を法ふくいも和徳らいあり所くあ徳

首志田三成（私曰三成といふ害人徳とは美し対大久保七郎右衛

命り足性先後軍く伊井右馬頭殿くつとを出れ

て法れすくりとも出次くの所く為ひも足性を迎新

足性とを和の足性ふをて徳つきを徳を敵をかり

行をふ伊所肯色くと色をあ中ふとて新を足性

とめくあ次くの所様りのとくく足性殿をを事ふ　左伝法

九月に志田い京殿へ十年一京殿人事ふく好ふ

るよし候て寄手の衆少く候ハ、勝ましと真田方の衆人数をくり出て
城を相続して出し大寄に寄て城より討て出て追崩し
其上にて川にて大軍に寄て伴まで押来り押寄の城か
も討くと云る弱者にして近く平の程近くて大返しに返し
真田の人数を追崩し其後元の出陣へ川元へ寄衆人数をくり
掛る真田方の人数くり寄衆人数にてハ不残討死の衆二度の方ハ根村と
後ろの方相支切まて休様不残者ハ真田も志つとして居る上杉
か勢も押寄る正十の年真田安房守か寄手勢の相違か
真田安房守ハ此人数を後陣千隈川其外鎮く来る前を討
也又真田安房守方く板垣殿保（甲氏板垣の一族）云者に居不覚悟弱兵

も、くり追付大ふすへにして来るを出て寄の陣太方敷て
所々二の焼討を畑の也く討く追りの手破と云安房守て
所を見切して相らくと陣を後か川の端く追立し大方討
より前をなし示して後陣にて古陣しの村元と立て又こと
甲信の衆追く安房ハ立さまく数くのめく宣安房ハらう手の名
人也相所屋も今迄さ侍く出る也相州人数来るおく軍し
て真田方迄る事付のくともと出て陣を云とるとと往追し
云を所屋へ入た具をと元大将追ハや又とて火を掛よ焼討くも
中々共田もれく火出り大々雪中敷の出征の不知と
しても方一里斗出り城下く追る方真田見えしす湯漬を

[illegible]くに対し[illegible]と対し[illegible]を[illegible]て[illegible]
人[illegible]屋[illegible]もかく[illegible]る大[illegible]係[illegible]
[illegible]井[illegible]と[illegible]
少田[illegible]の時[illegible]小[illegible]より上[illegible]田は[illegible]年[illegible]地
沼田[illegible]上[illegible]て[illegible]る大[illegible]は田[illegible]て沼田と少[illegible]
[illegible]或人[illegible]る小[illegible]は表[illegible]沼田[illegible]
中[illegible]上[illegible]は[illegible]と[illegible]大[illegible]沼[illegible]ふ沼田[illegible]
[illegible]て合[illegible]
[illegible]八百[illegible]
[illegible]年[illegible]八百[illegible]

[illegible]と表[illegible]と少[illegible]と思[illegible]て[illegible]と対[illegible]は統
[illegible]あ[illegible]れは八百[illegible]少[illegible]
[illegible]と[illegible]
太閤より大[illegible]と[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

その如く度々まてより證人ハ付まゐらせたるまゝにて代官之
同心不仕候て 権現様の御手まへ忠節之いく御勤二ツまて
権現様へ出し申候ハ其後明智信長公へ一揆の有しハ毛
時宜く 権現様ハ信長公為御弔合の首ニ御難ニ及ハれ候よ
て 権現様の御飯無き葉にそのまゝぬくまれ候て上下も
権現様へ一途ニて存入忠節をくれ候義其上にて帰
川合戦の刻信長公へ 権現様へ加勢の者被申候時 権現様小
筧与八ニ申付今度の先手よ御付候与八下人とさし
たるしもの首とりて合戦之前ニ成しとて帰陣よく致し
手柄村とも申候其時与八ハ家来渡辺金之丞事保
其与八ハ帰中より小兆寄候とて其くれにて之を見て
権現様へ出被成候ニ付御感状を下され候渡辺金之丞へ感状へ上り候ニ付書之
乃御感状を下されまちし与八ハ所 権現様へ安三に仰られ候見
御家来衆方にて御いそくの事をまちつる所有て今度先手
と御所付ニ人の外も多由といふして存ると一物有しハの
ものすへハ此刀あつくのにあるまじきと申候ハ大閤の御家
せうがるの類事しも其御にて御寿しらひを被下之物そとの候

御清書り 武功雑記

神君家康公御若年の時諸侍に御逢被成候御父
廣忠卿の御内のころ御無り家康様と御被成之ハ無之

ふかき中賀はるをとり出ていはく
はるの前に雪卿元はるの集めを縄の色とのかと
はるの味ら敵の色　伴右中賀なんとくらべ出て中賀
中とる事はるくらべ出て人とはのみけりとも
伴右奥のはるくはる人中賀とはるらべいを時中賀中とはる
はるの今事物とはる後うはるのたるをはるの紐ら成手支ないはる
風物人作雪の事はるはるりらあるて花はるを見はる遅る
の日必定上方はるの為と能しゆるこの首はるいはるはる成
はるとやはるる　伴右とも山中の体うをけふるか
はるらはる中はる作はるの賦はるとはるはるとはる時

伴右はるはるはる中賀はるとはるとはる押はるの成はるはる
はるはるはる天下はるはるはるはるはるはるはるはるはる
やはるはるはるはるはるはるはるはるはるはるはるはる
はるはるはるはるはるはるはるはるはるはるはるはる
はるはるはるはるはるはるはるはるはるはるはるはる
はるはるはるはるはるはるはるはるはるはるはるはる
はるはるはるはるはるはるはるはるはるはるはるはる
はるはるはるはるはるはるはるはるはるはるはるはる
はるはるはるはるはるはるはるはるはるはるはるはる
はるはるはるはるはるはるはるはるはるはるはるはる
はるはるはるはるはるはるはるはるはるはるはるはる
はるはるはるはるはるはるはるはるはるはるはるはる
はるはるはるはるはるはるはるはるはるはるはるはる
はるはるはるはるはるはるはるはるはるはるはるはる
はるはるはるはるはるはるはるはるはるはるはるはる

[illegible]日今大名ハ風く居うと名を忠有迄く
人くなれ所ちく此しこ年こ一年上杉家ハ奥ハ勢九
国ら長　家康公ハ向ら対ち人ハ陣中こ立り来りれハ
此度奥ハ向ハ拵ハ分大てハ忠義ハ中こと衣と日く
ハ家ハ此年ハ先ハ合く大抵ハ今度ハ会向く途中ハ背
中ハ有りと中変ハ先ハ変ハ所ハ所ハ者ハ此ハ行ハ
その人として生て居ハ者ハ今ハ長ハ無ハ武源く
ハ意ハ忠ある人と思ハ切く中ハ側ハ有合ハ火ハ名
見ハ一大事ハ人ハ来ハ事と色と見ハ去年ハ叶ハ内府公ハ
ハ拵ハ有ハ者ハ白服付ハ人ハ大軍ら引く

上杉ハ大軍ら来ハ来ハ地ハ怪と知ハ来ハ行ハ
ら大将と思ハ人ハ中ハ背中ハ人ハ者ハ事ハ我ハ見と
発軍の時ハ手段と中ハ重ハ此ハ所ハ敵ハ
敵ハ所ハ人ハ来ハ武ハ力ハ重ハ力ハ拵ハ
拵ハ悪ハ和ハ者と見ハ行ハ者ハ事ハ人ハ人ハ家ハ
者ハ人ハ者ハ悪ハ軍ハ向ハ軍ハ行ハ中ハ事ハ一度ハ見ハ人ハ
立拵ハ人ハ者ハ人ハ手ハ人ハ佐源ハ人ハ所ハ者ハ度ハ押ハ迄ハ迄
ハ中ハ者ハ者ハ人ハ悪と人ハ云ハ人ハ忠義と為ハ中ハ事
ハ力ハ佐ハ此ハ所ハ者ハ人ハ忠義ハ佐源ハ人ハ所ハ
所ハ人ハ此ハ拵ハ者ハ人ハ者ハ人ハ者ハ

生まるゝ上枝くの御ゝ甘蔗中あしの里の孤石の由来の所
を方と称ゞ小中村金ゝ方は武と石中ハ赤方大将軍
をつゝ小一金ゝ方ゝ一ゝ方ゝ大種とのゝれたゝ山恩
義く仍てゝの石宛行金ゝ有つゝ事ゝ之の一大
ゝハ之を小耳ゝと方ゝ之の武ハ石来門の
ゝ先来坂を出ゝ金上大ゝの義も石来門ゝと古事の汁
所を仍ゝ仍を義を方と作ゝ志ゝ出来ゝ之ゝ智
恵の様を思ひ　雀沢夜話

花房助兵衛秀吉の事ゝ小ゝ作行く伝流て来て和　仲君幅
切の事ゝ有ゝ小ゝ一人出家せしゝ武田の門先来山本

文寺の聖人小ゝ小ゝ事ゝ重ね坂小仲　仲
京花輝ゝ小ゝ金ゝ出助兵衛武田ゝ有ゝ身ゝ四至ゝ実有
ゝ方ゝ関ゝ京の時作行ハ京猶ゝ一時ゝて敬ゝ武ゝと小為有
作行ハ四至ゝ方ゝ方ゝ小ゝ出ゝ事ゝ言ゝ
作行出ゝ作ゝ紀伝ゝ作ゝ作有ゝ小ゝ紀伝ゝ
ゝ小ゝ小ゝ小ゝ中ゝ村ゝ金ゝ方ゝ世治ゝ作ゝ中ゝ
武田ゝ武ゝ方ゝ小ゝ遠ゝ方ゝ作ゝ為ゝ作ゝ
ゝ方ゝ方ゝ作ゝ武ゝ小ゝ作ゝ小ゝ作ゝ
ゝ作ゝ武ゝ作ゝ作ゝ小ゝ作ゝ作ゝ
ゝ作ゝ作ゝ作ゝ作ゝ作ゝ作ゝ
事ゝ方ゝ作ゝ方ゝ小ゝ方ゝ方ゝ方ゝ

ぬけのみちもなく家をあいた途と唐西なんとて家来
竹村四郎と申を竹村いそきあ組ちりと云左右ふ
二十人ばかりくゝ活居ふ事のとく云アの坂ゆう組ゝ
らんといふ事なると竹村おゝく今ゆうと坂陳く押し
申ふ活ゝもいい西ふたつくゝ行ゝ山明もなくゝて山組申
る事なゆゝ居らばそれるつきゝ山申りとゝゆゝ
きれこれまて組ゝふたつ事ゝ変えゝ山活ゝふと

云ふゝの捕いやゝくゝ見れゝゝ中途ゝて活ゝけんと活ゝ活
のゝるゝゝ知活とこゝいるゝふゝゝゝ活ゝくゝ申ゝゝゝ方ゝゝま
いゝゝもゝとゝ云竹村いやゝくゝ山ゝ通ゝ寺れいゝゝくゝ山体身有
ゝゝとゝゝゝまゝくゝまいゝゝもゝゝやゝくゝと山舞ゝとゝうゝゝ
四ふゝたゝふゝゝ文いゝゝ組ゝとゝる酒ひいゝゝ吳統日夢ゝ左ゝ廣ゝ乾
関ゝ東ゝ下ゝ向ゝの活將ゝ或ゝる或ゝ打ゝる或ゝ象ゝのゝるゝゝ為ゝ從ゝ人ゝ冥ゝ示ゝ組
ゝ行ゝ事ゝ中ゝ云ゝアゝの捕ゝ鳥ゝ氏ゝア為ゝ改ゝ申ゝゝゝゝ活ゝ
ゝ為ゝ冥ゝ示ゝと為ゝひゝゝ申ゝゝ為ゝと山ゝ申ゝゝ活ゝ組ゝと通ゝと池ゝ田ゝ輝
改ゝゝゝ冥ゝ示ゝのゝゝ為ゝと肖ゝ人ゝと吾ゝ氏ゝとのゝゝゝと那ゝ冥ゝ冥
ゝ東ゝ遠ゝ近ゝの活ゝ近ゝ格ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ竹村

を行てなんを集めこゝに小の舟とさゝせ敵の流れを防ぐ
後前かゝりて強弓を作せ人伯重千多助後ろをふ
手地くりうく雑兵人芝ゆの前こゝにて出でりと実ちく
うゝ実平の小助こまうすつくの兵作遠ちるい遠留い
やらに中ちとて輝政下地と指鉄いとゝ中七民アのい新兵
こ石汁ふく出ゝゝゝゝふい流い本坂と鉄五坂ゝゝと中され
り見見ゝ此これくゝ遠留と中行村二人い対く特出ゝん
あれとも前道と見れい大勢ふくさゝゝりたあゝい
遠の寺小て和泉ゝとゝ実平くゝ大前の流小白あき人
の上方小軍有とゝくゝ実ちゝゝ乃程なれ出ゝゝれふゝ流く

流て出ゝれとゝ行村ゝゝ流ちゝ河ゝ小白石ゝ流流
兵庫ゝ人あつりゝ乃ゝ池田輝政指ゝゝて後ゝ行村
伊豆ゝゝ石流ゝゝ武加雑化
実ゝ金銭の前波皐ゝて上方流流ゝゝ河大坂の輝
小義章伊源田中ゝ波ゴウド（河ゝ敬既ゝ川河ゝ来ゝ
川流ゝゝくゝ川ゝゝ敬ゝ遠留ゝゝ流ゝ川の流源ゝ
くゝゝと伊波ゝ波ゝ中ゝ系ゝゝ流ゝゝゝ名琴の川ゝゝ
彼小栗田ゝ波ゝゝと則中行ゝゝゝゝゝゝゝふゝ流河中
流ゝゝ流上ゝ者人の前ゝ行ゝゝゝゝ中ゝ川流ゝゝゝ中ゝ者
人ゝゝく張前の伊ゝ伊源ゝゝゝゝゝ川中の琴ゝゝ

筏をもて渡らんといふ所アリ此所を初セラル時假二
たゝつひそうに所アルかゝ川はゆくらのごとくされたゆく水猶緩
て依假後先陣く渡らるゝ所いんれ又強勇よりたる者也
偽くこ所斗流せい疾くゆ渡しをもアてらしなりと
襲く甲とをく出てるとを人廣田二郎三郎
さゝやき所アの甲とをもてるとを奪て一番小川へ出さう
されとも多くくるとつるふ俗く所五郎兵衛尉歌川端く行
役られい地むくあけらもとく廣田を付れを押除く云
アり同勝りと渡して歌後軍せりるれらんいろをもまく云
アを除せとく所のこゝをつゝを白波と名付をれ所ふ

れとゝふ武者紀伝
長重ら家長江口三郎ら夜中より敵を渡め小松と宝渡井の
業平く伏く渡と前く南倉次の軍勝以前の所をとゝふ
去乃前ちつる形別先勝ふ遠小切也く押行ると小松者
くゆ勝とを長重制せとを板勝く戦者ゝと古田
ゆ侍伏くちつ浜次以ちつ西沿ちつ不破多ちつ坂井
ちつ国七侍国竹ちつ雑賀ちアを不破八ちつ竹村孫三郎
荒田氏アを所ちつ侍西脇ちつ成田四郎ちつ郎波ちつ不破
生侍作々沿を備を国小侍為長沿ちつ破弓曽田絶
殿四郎小松沿ちつ備ちより近く白口と幾日金次の坂

敵長束か勢ハ行列三ツ二ツになして石田ハ伏兵を設
置て鉄炮を打せ味方の勢を誘ひ今此ハ吉備よりたよ
方打越て吾勢を謀して長々人数鉄炮を撃さんと欲して是ハ云はん
清くいりんとして其間に取しかは会士は敵を見て盛く而して応
重ヶ勇士杉村源三郎荒田民部近く鞁をあけ旗を振て走
く備の中を家破る馬蹄塵を備散して敵の人数大に崩れて沼に
落入江口三郎左衛門軍勢をすゝめて手鑓りて進く実に勇し
参考七加賀軍記
冥々京山源之丞石田方より田中兵部少輔方へ内通申来る其旨ハ
表向ハ敵なりといへとも真の石田ハ表台公に心ある旨と申越田中是

時家康公ハ赤坂に御着陣有て石田か方に返り忠を仕らんと
思ふ事ハ尤に候へ共ハ其ハ是と申越候ハ此上ハ秀頼公も
おとな也とて公ハ御覧有て天晴忠義成事今に初めぬ事なれ
感心被遊也さハ只誠ハ石田か事こそ人を度々と云へき也ハ是より明日
戦と合戦の返事ハ御返事にて与申てしと有けれハ田中兵
部少輔も殊に能く思へきと申書状に見てハ成かて是ハ御見え忍と不
安合戦すれハ内府公押返して来るかたに応し心得合戦の返事申越之と
作せあらハ此為といふ儀の聞と別儀在文言にて内府衷切に候
つとめや此度不残と秋ふ何卒今一人ハ田中兵部殿より参人
中合多度強切いたさへくと返書を石田是を見て大によろこ

ひ石内ゟ毎度書と文を紙ゟ出ス程切ハ沼田ハ書ス
も内満ゟよくハ所ハ所ハ所ハ所ハ今一人ハ繁ハ
為ハ毎ハ毎ハ毎ハ毎ハ合作ハ毎ハ毎ハ毎ハ
ゟ紙ゟ紙ゟ紙ゟ紙ゟ田中ゟ城ゟ城ゟ石田方ゟ
返書と見セ一ハ連ハ石ハ
ゟ形ハ毎ハ毎ハ毎ハ毎ハ毎ハ毎ハ毎ハ
利安ゟ毎ハ毎ハ毎ハ毎ハ毎ハ毎ハ毎ハ
伊ゟ毎ハ毎ハ毎ハ毎ハ毎ハ毎ハ毎ハ
ゟ返ゟ 雀ゟ衣佐

実ゟ系ハ 怪現様ハ軍ハ

ハ石田ゟ方ハ

根ハ内ゟ続ゟ紙ハ内ゟ伝ゟ出ゟ紙ハ依ハ敬ハ内ゟ軍ハ方ハ
続ゟ立ハ石田ゟ伝ハ前ゟ 前橋旧藩史書
実ゟ系ハ伝ハ根ハ八代ハ城ハ小田原ハ
と加藤ハ系ハ田ハ城ハ
竹束ハ迫ハ陣ハ利ハ合ハ
伝ハ清正ハ
行ハ中ハ利ハ
後ハ有ハ利ハ
人ハ行ハ八代ハ
行ハ後ハ

世を低し法師に古村右近大夫武忠を行として
小いの小いの小うり代への名前へ指出さるべく八代の繁昌を考へ従
かり国章し敬しにあるのれしとて 赤穂四郎兵衛少士
大坂ふ 作現在小栗の方石有られ四歌味をしかりくくに栗
と元のもれ云しい板倉伊賀守大師御堂へ使に神らくらに八方
石の栗を作石をいくかう人へと長元をしたえと山栗も有く
石数万近上中しを紙に御法度事ふ栗を法言ふ法しく有し
いろ栗をつぶやしと中納いさふ法言ふ元のもとて角兵衛八
八幡の立所ふ中村とりとせしとなり伊賀守殿二大代の山栗ふ
あり毒栗イ伊賀守殿ふ二代の山栗ふ敬ふ紙らしふも用物

守殿イ是ハ中村ふをとく 古き夜話
大坂山栗の時二條ふく夜毒和泉ふらふ栗ふ 作現在栗
ちるもと云ふ何んぐらいいなふと云ふ毒ふ和泉ふ
ふ返事ふ別のふるも云ふ先いけるそして歌と云ふ中川
ちるやうにあひしらひつ事入ふ仕らう別の言使ふ先い
也年一つに二度ふ言ふ入ふ
ちくさきものもとふ言ふ
こいふ
大坂山栗の時丹毒ふく須田伯耆守とく宗西の法毒毒
松泉ち尺ふく来ふく使毒ふ中ふ大坂ふ出所と云法

時くめいふく大容の事恩俗しかれども別に百万貫之積も
ゆ時分別所と思ふ人の多くの分所を少くお渡をつかとと
りれい西京の日乗らさる事有つる於我当一番　家康公古前
て謁見之恐之心を抱の我主く不堪とおもれい文中十の外
有く度重れ来る事なるも中を事多の多し
とひ為ら之花くと云られい西京いかに信玄して結婚
大善薩俗く宮ハ　家康公ゆうもと中れハ和泉守さ
らハ中事ハ仕ふ〳〵ふと云く俗ら西京望
家康公ハ俗く糸中上度ものなり和泉守ハ苦く我を中て
我当と進中とし也ハ1中く同心不仕と中られる

家康公ハ石山元所の俗ゆとハ思ひく和泉さとら石
れハ度重結ゆ　家康公宮ハ西京ハ中を方の中
なるふがハ不遠俗是ちりと行作西京を和泉をえく信て京
見〳〵　家康公の俗ゆ山井兼たもしと西京国俗ふて詰を
とひ〳〵〳〵　義昭俗
言帝公〳〵秀郷石山自筆の少状と吉川弾正と中を　性現俗山
和泉〳〵糸仕言帝公遠ハしもと中たく西状を為上中い
性現俗太し状上完仕性ハ久云
主ら中をい今度ハ奇特く之完いハ
為西西表〳〵引也い我俗是不色こい円く物来く東元中

合意度返却ニ付ハ仕ル和ニ成ル事ハ不
可有之ハ返ハ之外ハ何ニ成ル也ニ付ハ西口上ハ中合ハ出ス候ヘ

十一月廿一日　　秀頼正印

友意和泉殿

西口状ト　往況ハ上覧ニ入レ申候ハ暑氣ニ成ル日ハ申ス度ニ有之
ト歌ハ四一時南ハ申シ下ル人ハ申ス也ハ悔ハ申ス
ヒ利ト申シ上ル事ハ申ス有ル事ハ申ス申シ上ル
来候ハ申ス事ハ有ル事ハ申ス申シ上ル心ハ
西状ト申ス事ハ申ス申シ上ル事ハ申ス
智恵不可有之事ハ申ス上意ハ秀頼ハ申シ上ル

と申ス事ハ申シ上ル事ハ申ス申シ上ル
あ申シ城中ハ迎ハ申シ上ル事ハ申ス
申シ上ル申シ上ル事ハ申ス
申シ上ル事ハ申ス申シ上ル
申シ上ル事ハ申ス申シ上ル
申シ上ル事ハ申ス申シ上ル
申シ上ル事ハ申ス申シ上ル
申シ上ル事ハ申ス申シ上ル
申シ上ル事ハ申ス申シ上ル
申シ上ル事ハ申ス申シ上ル

二の丸も落て藤田勢も追々に中ハ大軍城中へ切入て戦ひしく
押懸中車寄定て大勢来り前にハ井伊掃部人数大方
後軍二の丸も取れは天守前後矢に入乱れて城中の[illegible]一統も不
残付丸二の丸にハ天守上向の佐まて[illegible]くる是まで申にも[illegible]と[illegible]
中にハ秀頼公の[illegible]と思召[illegible]通りに[illegible]ハ[illegible]千畳敷まで
御[illegible]く高名軍[illegible]重く[illegible]軍兵[illegible]通り
小[illegible]ニ天守時岩波平右衛門中にハ是も此一軍[illegible]ニ寄手[illegible]人々
軍兵と[illegible]と見るのしとしく[illegible]ハ後白石[illegible]尾[illegible]もの[illegible]
二木勘右衛門小笠原牢人入道円[illegible]に[illegible]
[illegible]是も此一統二の[illegible]申上を[illegible]書まて何[illegible]不残

此時近付後軍二の丸にハ天守時岩波中にハけるく兵庫[illegible]
[illegible]人数を[illegible]て佐渡[illegible]と申にハ時牢人佐渡[illegible]
上申上りて秀頼公御前へ[illegible]と申にハ[illegible]
と申[illegible]上ハ[illegible]とハ二とハ[illegible]
[illegible]天守時[illegible]と勘右衛門牢人円[illegible]と使て佐渡守前へ[illegible]
出申上[illegible]牢人ハ[illegible]
掃部[illegible]家来を見[illegible]しく七[illegible]く軍[illegible]
二の丸と大[illegible]の馬[illegible]
行進[illegible]台何歳[illegible]牢人ハ[illegible]
[illegible]馬是[illegible]の[illegible]四五町[illegible]

竹藪有之所小梅ヶ原泰平大方そこと見申候得者不慮ニ居候今
おしまくられ候て散々之事ニ而もなきと口惜候ニ付申候より是
と遠侍之所おかしく候前方ニ是より出候ニ付手柄之始ニ申ニ付と申
中悔申候掃部殿家老相良度主水出付ても候者揉出し一手の
人数悉討死申候ニ付剣出付ても候もそも掃部父ハ家来共若
者之所討死申候ニ付口惜く當時分秀政公ニ父子偏ニ相待へ参内
能申す候同然ニ候ハ見無所存候ニ父掃部殿蒙机ニ縛そ是を
実検ニ被成候ニ家来悉討死候ニそてを指出し候目ニかけ候結より是中
之ハ何とおかへ候は是も思事ニ候死候口惜者候掃部殿も方ハ何も是ま之
候挨拶被成候得ハ今日此敵ニ討死候ニ手柄目出度とて申候へ見苦しく候挨

拶也云々候様子ニ相見へ申候ニ何も思ひ候へ共へかとも見へ申候秀政公忠功
公へ何く是ハ此時の軍ニ何より不と何く是ハ而くニ討死之事有之
為義とて何く是ハ我等も存候ニ存らの御挨拶　両公諸将上使とハ
今日之軍播ア一人こ骨折之程見候ハ無之ニ付其上之軍ハ不討
能者ニ申上候ハ今日の軍ハ云々大輔より遠く出て云々ハ云々大
輔父子合戦この仕ハ人数皆向ひ候んとの意よて首の軍此様とハすへ
是仕達らね者ハ今も以て札据悔乃由とも申上ハ流石武功の人とそ
申候　小笠原伐之記

為京一揆の内城中より夜討出し黒田右馬之佐先手の者多く討
是す上梅の木二重まて破り候く其ほとき候ニ右馬之佐先手の者右

九合ちゝてゝ歌毎く付しめ或人仰せられハ御奥仕
者の所堂中より歌付くと申と仰られ候ハ尤なるものハ
彼も歌の事と思ひ定めて油断して時の大将こゝを毎二
重彼こゝを先警攻軍して一番に破るを手柄歌と付たる
りとも仰の通ハあらんと仰られハ拾遺集よりも不書ハ歌付
の人数所存あしく実の別き歌付と申く歌の方ハ申く別れ
ひく付けハくてゝなるものハ歌なるものの所と思ひ定めて
そと紙中つゝを見こゝ代

国立公文書館
National Archives of Japan